

高等学校国語科採点基準

3枚のうち1

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号	正 答 [例]	採 点 上 の 注 意	配 点
問一	2		3
問二	4		3
問三	1、4	全部合っているものだけを正答とする。	4
問四	4		6
問五	読み手の読書に関するこれまでの経験や現在の状況等によってテキストから読み取られるものは異なり、その意味で正しい読み方はないということ。(67字)	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	10
問六	筆者の述べる「自分を基準にして作品との距離が測れるようになる」とは、生徒が作品に表れているものの見方や考え方をそのまま受け入れるのではなく、自分の知識や経験と照らし合わせて、自分なりの理解を基に作品を対象化し、吟味したり検討したりしながら読み、自分のものの見方や考え方に対する作品に表れているものの見方や考え方の位置付けが分かるようになることを表していると考ええる。 そのことを踏まえ、国語科の指導においては、生徒が批判的な態度を常に抱きながら本を読み、読書感想文を批評として成立させることができるように、登場人物の行動や物語の展開の意味を考えさせたり、登場人物と自分との考え方の違いを確認させたりする。また、作品に表れているものの見方や考え方と自分の考えを比較させ、共通点や相違点を確認させたり、作品中で述べられている主張と根拠との関係は適切か、根拠は確かなものであるのかといった、内容の信頼性や妥当性を吟味しながら読ませる。このような指導を繰り返すことで、作品を対象化して、吟味したり検討したりしながら作品を批判的に読み、自分の中での作品の位置付けが分かるようにしていくことが考えられる。	問いを正しく捉えていれば、内容は異なってもよい。	20
問七	㉞ し	語として採点する。	各 2 × 5
	㉟ 一致		
	㊱ かくとく		
	㊲ かいぎ		
	㊳ 革命		

56

高等学校国語科採点基準

3枚のうち2

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号	正 答 [例]	採 点 上 の 注 意	配 点	
二	問一 3		3	
	問二 3		3	
	問三	ア 4		各 3 × 2
		イ 2		
	問四	A 渡るであろうになあ	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	各 6 × 2
		F どうして断り申し上げるだろうか、いや断り申し上げないだろう		
問五	鵲や紅葉の橋を渡ったり、渡し守のいる舟で渡ったりするなど、牽牛が天の河を渡る方法があるということ。	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	8	
問六	たとえ事実とは異なった内容になったとしても、思ったり感じたりしたとおりに詠むのが「歌のならひ」である。【和歌Ⅰ】もそうした「歌のならひ」に沿った和歌の一首で、実際には天の河を渡って織女に逢うことができたが、あまりにも短い逢瀬で逢わなかったかのように感じられたため、天の河を渡り切れずに帰ったと詠まれた歌であるという解釈を示している。	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	1 4	
三	問一 3		3	
	問二 2		3	
	問三 4		4	
	問四 2		4	
	問五	そなたでなければ、私はどうしてこのような言葉を聞くことができたであろうか、いやできなかったであろう。	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	8
	問六	書物に述べられていたことを、太宗が目当たりにした煬帝の滅亡と結び付けることにより、太宗の語った君主の姿が、正当なものであることを太宗に実感をもって理解してもらおうとしたため。	問いを正しく捉えていれば、内容は異なってもよい。	1 4
四	<p>「現代の国語」は、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成することを主眼に置いた科目として設定されており、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の指導の充実が図られているためと考えられる。</p> <p>「現代の国語」が上記のように設定された背景として、社会が急速に変化していく状況において、論理的な思考力、相互に交流する力といった実社会で求められる言語能力の育成が国語科教育に一層求められていることや、話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないという高等学校の国語科の課題の解決が求められていることが挙げられる。</p>	内容を正しく捉えていれば、表現は異なってもよい。	1 2	

高等学校国語科採点基準

3枚のうち3

【注意】問題によっては、部分点を可とする。

問題番号	正 答 [例]	採 点 上 の 注 意	配 点
五	<p>この書簡は、太宰治が、芥川賞受賞を熱望し、そのことを佐藤春夫に訴えることを目的として書いたものである。</p> <p>「文章の構成や展開」については、芥川賞が常に心に掛かる不安の中、執筆した作品の紹介、芥川賞当選の際に発表したい作品とその作品に対する自信、芥川賞受賞の懇願、追伸という構成になっている。このような構成にすることで、不安の中、努力を続けてきたことや今後も作品を書き続けるという意欲を強調し、何としても芥川賞を受賞したいという思いや、この手紙を書かずにはいられなかった心情に対する理解を佐藤に求め、受賞できなかった場合の太宰の落胆ぶりを想像させるという効果がある。また、追伸として、太宰は、佐藤の師である生田長江の死を悼み、佐藤の胸中を思いやっている。しかし、この内容を書くことによって、機嫌を取ろうとしているような印象を佐藤に与えるおそれもあると思われる。</p> <p>「表現の特色」については、自分の心情を伝えるために、短い文や読点で区切った言葉を重ねて表現していることが特色として挙げられる。具体的には、芥川賞受賞に対する必死の思いを、「私を助けて下さい。佐藤さん、私を忘れないで下さい。私を見殺しにしないで下さい。いまは、いのちをおまかせ申しあげます。」と短い文を重ねて表現している。また、芥川賞が常に心にかかる不安を「不自然で、ぎこちなく、あがけばあがくほど、いよいよ強くつながって行くやうなややこしい状態」と表現したり、この手紙を書くに至った心情を「あきらめず、なまけず、俗なことにもまめまめしく、甲斐甲斐しく真面目につとめるのは、決して恥づべきことでなく、むしろ美しいことでさへあると信じ」と表現したりしている。このように短い文や区切った語句を重ねて表現することで、太宰の必死さや切迫した心情を生々しく伝える効果がある。一方で、これらの表現からは、佐藤にある種の脅しを含んでいるように感じさせたり、このような手紙を書くことを正当化しようとしているように受け取られたりする可能性もあると思われる。</p> <p>このような文章の構成や展開、特色ある表現によって、この文章はよく言えば、芥川賞を熱望する太宰の必死さを伝える文章となっており、またややもすれば自己中心的な印象を与える文章になっているとも言える。</p>	<p>問いを正しく捉えていれば、内容は異なっていてよい。</p>	50